

ディレクター日誌 (活動・研修生の様子)

期 日：前期：平成28年8月16日(火)～25日(木)【9泊10日】

後期：平成29年度での指導研修

場 所：十種ヶ峰青少年自然の家及び県北部山域（山口市阿東）

研修生：県内の教員等10名

1日目「開会式・ダッフルシャッフル・バックパッキング」

期 日：平成28年8月16日（火）

場 所：十種ヶ峰青少年自然の家

～滑川林道

平成28年度の研修会が始まった。今年度の研修生は10名で、20代から50代までの様々な年齢構成のメンバーが集まった。緊張感や不安感もあると思うが意欲を感じられる。研修会スタッフも研修生の思いを大切にしつつ、来年度以降スタッフとして活動に関わってほしいという願いを持ち、これからの10日間を過ごしていく。

今年度も「体験を通して学ぶ」「指導者の視点を身に付ける」ということで、早速装備の準備やダッフルシャッフルを始めていく。初めて目にする道具を手にしながらか不安を見せる参加者もいたが、3名のスタッフの丁寧な説明・関わりのもと、活動に入った。

当初の予定では、午前中のうちに自然の家を出発して沢登りを行う予定だったが、朝から土砂降りで、雨が上がっても増水しているであろう川での活動は中止となった。参加する前に予定表を見て「沢登り」を楽しみにしていた研修生は残念がっていたが、自然を相手にした活動であること、リスクマネジメントが大切であること、状況に応じてプランを変更することを知るいい機会となった。「この状況で子どもたちを連れていて川に入りますか？」という指導者の視点についても学ぶことができた。

一つの活動がなくなったことにより時間に余裕ができたが、無駄な時間はない。天気と相談しながらコース中に使用するマウンテンバイクの調整や練習、昼食やパッキングなど、状況に応じて必要なこと、できることを行い、午後には自然の家を出発して滑川林道へモービル移動をした。

そこからは本日のテン場（＝宿泊地）までバックパッキングが始まる。重たい荷物を持って歩く初めての活動である。ザックの重さに衝撃を受けながらも、何とか歩みを進め、テン場に到着した。インストラクターからテントやタープの張り方やテン場での決まり、食事のルール等を学んだ。これから、中身の濃い10日間にしてほしいと願う。



2日目 「バックパッキング」

期 日：平成28年8月17日（水）

場 所：滑川林道～飯ヶ岳～屋敷川林道

2日目の始まり。朝の動きはゆっくりしている。山の生活リズムや研修生同士の関わり合いなど、慣れるまではもう少し時間がかかりそうである。

今日はいよいよ本格的に山の中に入っていく。今回の行程で最初のピークである飯ヶ岳の山頂を目指して登っていく。1日の行程としては短い設定であるため、歩き方・休憩の取り方・危険な動植物について等、時間をかけてレクチャーしていく。

グループで初めての山歩きだったせいも、予定していたよりも時間がかかったが、無事に山頂に到着した。重たい荷物や歩き慣れない山道に苦労しつつも、少しずつお互いに声を掛けながらの登頂である。この研修会の中でたくさんある山頂のうちの最初の山頂である。この体験を、ずっと大切にしてもらいたい。

山頂からは急な下りである。ここでも下りの歩き方を学びつつ、手を取り合いながら下山した。

テン場に到着した後はディップ（＝水浴び）をした。1日山を歩いた後なので火照った体に沢の水が気持ちいい。自然の中で過ごすことで水や風、木陰など日常では感じることができないご褒美を受け取った。

ミーティングでは今日の活動を振り返った。研修生の中では、お互いのバックグラウンドや経験値、考え方の違いなどにより、少しずつモヤモヤの気持ちが出始めてきているようだ。

また、インストラクターから目標はどんどん修正したり加えたりしてもいいという話があった。「人の限界は他人が決めるの？」「自分の限界って知ってる？」どのような決断をグループがするのか、その決断までの過程が大切である。より充実した研修とするために、明日からも自分や仲間としっかり向かい合う1日にしてほしい。



3日目 「バックパッキング」

期 日：平成28年8月18日（木）

場 所：屋敷川林道～弟見山～仏峠

前日のミーティングで決まった「早く起きて、早く動いて、早く着く」という目標もあって、スムーズな3日目の朝の始まりとなった。出発前に、物品が見当たらないというトラブルもあったが、なんとか見付き、バックパッキングを終えて山の中に入っていく。

今日は最初に、これでもかというくらいの傾斜の道を登っていく。途中にはロープが張ってあるようなコースだが、お互いに支え合いながら分岐の稜線へ出た。ここですぐに今日のテン場に向かうのか、それとも若干遠回りにはなるが、いったん筋ヶ岳山頂へ向かうかどうかのミーティングが行われた。体力や1日の行程への不安も出てきたが、話し合いの結果、筋ヶ岳山頂を目指すことになった。筋ヶ岳からの絶景はいろいろなものを吹き飛ばしてくれるくらい素晴らしく、この旅2つ目のピークに笑顔が広がった。

ここからはひたすら稜線を歩く。県境を示すために土が盛ってあり、要所要所には県境杭が打ち込んであるので、それを確かめながら歩く。地図では読み切れないアップダウンが続き、弟見山を目指す。そして後半は急な下りがひたすら続く。「いいペースだよ」。疲労もある中で、お互いが相手やグループを意識しながら声かけをして歩いている。

全員無事に今日のテン場である仏峠に到着した。スタッフも一緒になり、全員が笑顔のハイタッチ。今日感じた達成感や充実感を大切にしてもらいたい。

仏峠では今日もディップをした。早く着いたことでできるご褒美である。美味しい仏峠の水（この水が1番美味しいというスタッフも多い）で夕食を作り、充実した気持ちで眠りについた。



4日目 「バックパッキング・ソロ入り」

期 日：平成28年8月19日（金）

場 所：仏峠～三ツ頭～クォーツバレー

本日の行程も昨日と同じで前半に急な登りがあり、その後は稜線を進む。前半は急登だが、それ以降はわずかな登り下りを繰り返すだけである。三ツ頭という地点を越えて藪漕ぎが始まったが、お互いの役割も連携をとりながら進んでいく。歩みは遅いが手を取りながらグループとしての動きが確実に歩を進める。



正午を大きく過ぎて桐ヶ峠に到着。ここでも昨日と同様に高岳という山のピークへ行くか、このまま今日のテン場に下りるかどうかのミーティングが行われた。来年以降スタッフとして子どもを連れて歩くことがある山である。「せっかくだから行きたい」「テン場までの時間を考えると厳しい」「体力が持つのかどうか」、、、、いろいろな思いが入り交じる。ミーティングの結果、今回のグループの決断は高岳に行かずテン場であるクォーツバレーを目指すということになった。



桐ヶ峠からクォーツバレーに下り、ソロ入りの前、ミーティングにて研修生の思いが次々と出てきた。

「言いたくても伝えられない」「何のために参加したのか」「普通に頑張っていることが、評価されない」

など、グループで決めながら動いていたが「なんとなく」の流れの中で決断されていたこともあり、ここにきて溜まった疲労とモヤモヤが溢れ出たようになった。予定外に長いミーティングとなって、お互いがそれぞれの思いを出し合ったが、スッキリとはしないまま、次の活動であるソロに入った。

ソロの時間は今までの“動”の活動から“静”の活動となる。また、“集団”から“独り”になる。まずは溜まった疲れを癒やしてほしいが、せっかくのチャンスでもある。自分と向き合い、自分のこと、家族のこと、仲間のこと、たくさんのことを考えてほしい。

5日目 「ソロ明け・フルーツパーティー」

期 日：平成28年8月20日（土）

場 所：クォーツバレー

今年度もソロの時間は1泊しか確保できなかったが、せっかくのソロである。少しでも有意義な時間を過ごしてもらうために本日の移動は入れていない。たっぴりとは言えないが休息と自分に向き合うための時間を確保し、午後2時過ぎにソロ明けのお迎えに行った。1人ずつそれぞれのソロサイトから出てくる。1晩だけだが別々に過ごした仲間との再会。しかしまだ声を発してはいけない。昨日のミーティングのこともあり、お互いの顔を見ながら嬉しいような恥ずかしいような笑顔で向かい合う。

フルーツパーティーの始まり。目の前に置かれたたくさんの果物をお互いの口に運ぶ。ここでいよいよソロ明け。しゃべっても良い。楽しい時間に今まで話せなかった分の思いが溢れ出す。お互いが仲間を意識を向け合いながら、大量にあった果物はあっという間になくなった。

ソロの振り返りでは、「人に合わせることは難しい」「本当は褒められたい」「人の意見を聞けるように努力したい」「何を学びに来たのかははっきりさせたい」など、昨日以上にそれぞれの思いが出てきた。スタッフからは、自分が研修生だった時の出来事や今回のスタッフとしてのこのプログラムへの思いを踏まえながら、「活動をこなしているだけではないか」「しっかり目標設定ができていくか」などの言葉が投げかけられた。

これからグループとして成熟していく過程の中で今日のミーティングは大きな分岐点となるはずである。そして感じたことは今後子どもたちに寄り添うときに大きな財産となっていくと、信じている。



6日目 「グループツアー・ロッククライミング・ファイナルツアー」

期 日：平成28年8月21日（日）

場 所：クォーツバレー～ロックサイト～鍛冶ヶ原

今日の活動はロッククライミングである。研修生は夜のミーティングで目標が定まったのか、久々の仲間との歩きが楽しみなのか、とても良い笑顔でクォーツバレーを出発していった。

ロックサイトへ到着して活動の説明を受けた後、前もって決めていたクライマー（登る人）とビレイヤー（支える人）2名でお互いが3人組を組んで岩肌に立ち向かった。

手がかり・足がかりを探しながらクライマーは必死に張り付いている。下ではビレイヤーが声を掛けながら、ザイルの張り方はきつすぎても緩すぎてもだめで、お互いが息を合わせて少しずつ登っている。研修生はそれぞれが自分の目標に向けて岩を登

り切った。岩で擦れて・ザイルで擦れて皮がむけたお互いの手を握りしめて称え合い、笑顔いっぱい、支えてくれた仲間感謝する。

ロッククライミングのクライマーとピレイヤーの関係は子どもたちと指導者の関係にも似ている。「成長していく子どもたちを支援していく大人」「強い力で引き上げ続けるのか、それとも子どもたちの動きに合わせて支えていくのか」「ザイルを通じて感じる仲間の存在」「相手を信頼すること」「お互いのバランス」「それぞれの役割の大切さ」などについて考えた、ロッククライミング後の振り返りから出てきた。

ロッククライミングを終えるといよいよファイナルツアーである。ここまではスタッフが一緒に歩き、基本的なトレーニングから、少しずつグループに主導権を移行してきていたが、いよいよここからは研修生だけのツアーとなる。

研修生たちは再度お互いとグループの目標を確認し、昼食をとってツアーをスタートした。ここまでくるとスタッフは見守るだけである。あとは無事に明日の十種ヶ峰山頂での出会いを待つだけ。ここまで少しずつ成熟してきた10人のツアーが素晴らしいものになるように願って見送った。

定時の無線連絡では元気な声が届いたが、なかなか「テン場に到着した」との連絡が入らない。グループは想定していたルートと違う道を通っていたようだ。自分たちが切り拓いたルートが、どれだけの宝物をプレゼントしてくれただろうか。これもまた、大きな学びである。

夕刻、やっとのことで今日のテン場に到着した。テン場では、今日もディップを試みるそうである。スタッフは側にいられない。一緒に喜べない寂しさを感じつつ、ステキな夜を過ごしてほしい、明日のツアーがよりよいものになることを願って眠りについた。



7日目「ファイナルツアー」

期 日：平成28年8月22日（月）
場 所：鍛冶ヶ原～十種ヶ峰山頂～神角

朝6時、無線の向こうから元気な声で出発の連絡が入る。今日のルートはスタッフが提示していた尾根ルートではなく、みんなで相談して林道を通るルートを進むそうだ。この活動の中では特別な場合を除いて「こうでないといけない」というものはない。グループの状況や起こりうることの想定をもとに決めたのであればOKである。天候も味方している、順調に進んでほしい。スタッフは研修生からの無線が届く場所を移動しつつ、山頂でのお出迎えに備える。

正午前、山頂で待つスタッフに遠くから研修生の声が聞こえてくる。こちらからの呼びかけに元気な声が帰ってきた。しばらくして研修生が山頂にやってきた。全員が手を取り合って笑顔で到着。お互いの健闘をたたえ合い、スタッフも含めた全員が笑顔でハイタッチをした。途中ルートを見失いかけたそうだが、昨日の経験から、相談して一度来た道に戻ったそうだ。すばらしい！リスク回避とグループの合意形成、これからスタッフとして関わることになる仲間たちのたくましい成長ぶりにスタッフも喜んだ。「Good job!」心地よい風を感じながら山頂からの景色をみんなで独占し、山頂を後にした。

山頂から神角へ下山して本日は神角神社にテント場をとる。これまでは山の中での野営だったが、ここにはトイレと水道がある。日常のありがたみを感じながら、ファイナルツアーを振り返り、明日からのサイクリングに備えた。



8日目「グループツアー」

期 日：平成28年8月23日（火）
場 所：神角～須佐エコロジーキャンプ場

起床して出発準備をして「さあスタート」という時にトラブルが発生した。昨日タープを張った際にペグが折れていたらしく、しかもそのままにしておいたために折れたペグを紛失してしまったのだ。今日に至るまでも何度も物品の紛失があり、その度にみんなで探していたのだが、また物品の紛失が起きてしまった。

グループの決定は「見つかるまで探す」だった。駐車場の砂利を手で払い、隅々まで探すが見つからない。そして話し合う。見つからないままにしていることに、「納得で

きるのか」「探しきったのか」再び地面に這いつくばり、スタッフも一緒になって探すが見つからない。再度話し合う。「日常に近づいて気が緩んでいなかったか」「人任せにしていなかっただろうか」「初日からの経験が生きていたのか」たくさんの反省とともに14時過ぎまで探し続けたが、ペグは見つからなかった。

子どもたちの活動でも物品の紛失はよくある。スタッフの立場からすればグループの成長のチャンスでもあるため、トラブルをワクワクして見守ったりもするが、トラブルは“起こらないようにする”“起こってしまったら全員で解決する”、そして“繰り返さない”ことが大切である。見通しを持って行動することの大切さもスタッフから伝えられた。今回のことが経験（苦いものではあるが）としてこれからは生きて欲しい。

神角神社を出発し、須佐までのマウンテンバイクツアーが始まった。スタートは遅くなったがマウンテンバイクの調整やギアチェンジの仕方、ブレーキのかけ方やサドルへの腰かけ方といったマウンテンバイクに関する事、車間距離の取り方や路面のとらえ方といった自転車に乗る上で注意することなどを、道路交通法と結びつけて確認しながら須佐を目指した。

ここで、問題が発生した。車道を走ることやトンネルの中を走る恐怖感から、スピードを十分に出せず、車列の最後尾を走行していたメンバーがおり、前の自転車との距離が大きく開いたまま進んでいたのである。10人で歩いていた時と違い、自転車に乗りながらだと前後の声かけは難しい。しかし、バイクツアーもグループでの活動である。「これでいいのですか?」「目標は何?」「午前中の活動は何だったのですか?」「協力って?」スタッフからの投げかけに再度研修生が一つの目標へと向き合う。

夜のミーティングでは「言葉だけになっていた」「目標はファイナルツアーに向けてのものではなく10日間のものだ」「まずはやってみよう」「信頼と甘えは違う」などの言葉が聞かれた。明日はいよいよ活動の総仕上げである。全員が目標に向かって「Nice Challenge」をしてほしい。



9日目「サイクルマラソン・クリーンナップ」

期 日：平成28年8月24日（水）

場 所：須佐エコロジーキャンプ場～津和野～十種ヶ峰青少年自然の家

9日目の活動はサイクルマラソンである。ここまで、初めて出会った10人が、それぞれの個人の目標とグループの目標に向けて、共にチームとして活動してきた。素敵な仲間になったが、明日の閉会式を終えると各自の生活に戻っていかなくてはならない。このサイクルマラソンはそれぞれの生活への旅立ちの儀式である。10人がそれぞれの目標を設定し、その目標に向けて頑張る。そして、このマラソンは競争ではない。大切なことは、個人のチャレンジではあるが、9日間を共にした他の9人の仲間も同じように頑張っていることを意識し、自身の全力を尽くすことである。個人ランに入ると、横に仲間はいないが、近くで、そして遠くで理解し合える仲間が頑張っている。そのことをしっかりと感じながら頑張してほしい。その感覚は明日以降に実生活に戻っても同じである。

須佐を出発してサイクルマラソンのスタート地点まで最後のグループツアーをし、いよいよ個人ランのスタートである。各自が用意してあった紙に自分の目標を記入してスタートしていった。コースは須佐から田万川、そして津和野から嘉年を通して自然の家へ戻るルートである。途中9ヶ所にチェックポイントとして用紙が置いてあり、研修生はそれぞれが自分のことや仲間のことに関する思いを書き込んでいく。チェックポイントで出会った仲間と談笑し、途中の湧き水に歓喜の叫びを上げながら、10人がそれぞれ自分と向き合いすばらしいチャレンジをした。

自然の家へとつながる最後の上り坂はサイクルマラソン最後の難関である。全てを出し切って帰ってきた研修生をとびきりの笑顔とハイタッチで迎えた。1人、また1人と研修生が戻ってくる。嬉しかったこと、悔しかったこと、苦しかったこと、同じ挑戦をしてきた仲間だから話せることをみんな話しつつ、先に到着した研修生と一緒に帰ってくる1人ずつを盛大にお迎えした。

1人がまだ遠くにいるとの連絡が入り、心はつながったまま、いつでもお迎えできる状態で次の活動に入った。この日までお世話になった装備のクリーンナップを行う。初日、初めて手にした装備のザックやスパッツの汚れが9日間



の活動を思い起こさせる。そのテントやザックについた泥などの汚れを落とす。来年度以降も研修生が使用する装備である。再びきれいにして次の人へつないでいく。クリーンナップは、この研修の大切なプログラムの一つである。

最後の1人が自然の家への最後の坂を上り始めたと無線が入る。全員が手を止めてゴールにスタンバイ。姿が見えないうちから大きな声援が飛ぶ。「来た！」最後の最後までチャレンジした姿を見届け、全員がゴール。「Good job!」「Nice Challenge!!」

10日目「サービス・クリーンナップ・閉会式」

期 日：平成28年8月25日（木）

場 所：十種ヶ峰青少年自然の家

最終日には昨年同様サービス(他者や環境への奉仕活動)を取り入れた。OBSではプログラムの中でトレイルの整備などのサービスも重要なプログラムである。今年度は同時期に開催されている中高生プログラムの運営を手伝う。

中高生も同じく今日が最終日でマラソンを行う。このマラソンは研修会のサイクルマラソンと同じ目的で実施される。そのコースの各所に安全確保のために研修生が配置された。来年度以降スタッフとして関わる時に、スタッフがどのように運営し、参加者を支えているかを知る機会でもある。そして前日に子どもたちと同様の体験をしている研修生は現時点で最も中高生の気持ちに寄り添える人となっている。研修生たちはチャレンジをしている中高生たちを支え、声援を送った。そして全走者が通過した後に各配置ポイントから1人ずつ合流して10人で走って帰ってきた。見ていて嬉しくなる光景だった。

午後の閉会式の前にそれぞれが感想を記入し、バンダナ(=修了証)に寄せ書きをした。仲間を想い、笑顔で言葉を伝え合った。

まっすぐで素直な今回の10人の研修生、たくさんのことを体験した。この10人は今回体験して感じたことをしっかりと自分の中に落とし込み、生かしていくことができると思う。そして感じたことが多かった分、同じ状況になっている子どもたちにベストな手の差し伸べ方ができると思う。

新しい扉を開き、第一歩を踏み出した10人はそれぞれの実生活へと帰って行った。また会いましょう。

